

The Real Face

取材・文／竹中 聡(本誌) 撮影／中島光行



Tina

ティナ

special interview

小柄な体から、巨人が踏みしめるような強く重いリズムを奏でるシンガーが、ズシン、ズシン、ズシン……。例えるなら、巨人がその足を地面に力強く踏み抜くようになりズム。グルーヴが無いわけではない。むしろ豊富なくらいなのだ。グルーヴよりも「リズムが耳に残る」。そんな歌を彼女は唄う。

アーしたバンドを組んで唄った。メンバーの年齢も様々で、ヴォーカルの彼女は最も年下だった。DJの先輩や、腕に覚えのあるバンドのメンバーからまた、深く教わった。完璧に「現場で育っている」タイプだ。完璧

「と名を冠し、自らの名を叫ぶ。それは揺るがない矜持だと思えてならない。約10カ月の時を経て、京都に入る。それも宵山の日の、夜に出会える僥倖。その彼女が7月、しかも宵山の京都にやってくる。自身の初京都はやっぱり、修学

顔合わせ。「可笑」では披露しなかった曲も予定しており、彼女の胸に去来するのはどんな感情なのだろうか？
現在、マーケットの主流となっているサウンドではあまりお目にかかれるものではないが、インプロヴィゼーションは慣れ親しんだジャズの真骨頂、望むところだ。「インプロヴィゼーション。確かにそう頻繁に耳にする言葉じゃないでしょうね(笑)」



現役のジャズ・サクソプレーヤーを父に持つ。「子供の頃、父の車に乗れば必ずジャズでした。しかもインストで歌がないから退屈で(笑)。問答無用で流れるサウンドに、最初は興味を示さなかったが、「小学校の高学年くらいになると興味を持ちだし、受け身じゃなくて自分から聴きたいと思いはじめたんです。その時に初めてミュージシャンを父に持ったこと、身近にミュージシャンがいたことが恵まれていると思って」。

初めて人前で歌ったのは中学生の時。父が演奏するジャズクラブで「サマータイム」と「ジョージア・オン・マイ・マインド」を唄った。パリのスタンダードをジャズクラブで唄う、いや「唄える」中学生。恵まれた環境と言わずして何と言おう。中学以降はブラックミュージックに傾倒し「70年代以降のブラックミュージックについては父より私の方が詳しいかもしれません」とまで思えるようになった。

カヴァーアルバム「Respeto」に収録した「BILLE JEAN」や「JUST THE TWO OF US」「LONG TRAIN RUNNING」は、世界的に言う不思議なチョイスだ。レアグルーヴと呼ばれるアナログサウンドを好んで聴いていた。ディスコ全盛期にDJたちがこぞって回したナンバーである。大人の世界に憧れていたとして、ディスコに出入りできる歳でない頃に聴きまくっていたとすれば、かなり早熟な女の子だったのだらう。アリス・ウィンド・アンド・ファイア、シャラー、シック…は黒人のポピュラーソングであり、ハッピーなサウンドだ。そんな歌が大好きだった。チャカ・カーンや、ルーファス・アレサフランクリン…、ソウルばかりをカヴ



現在までにリリースしたオリジナルアルバムは5枚。デビューアルバムがあったからこそ、2枚目があった。アルバムレコーディングやリリースはその連続であり、前作と次の作という考え方はしないと云うが、自らの名を冠した、見事にシンプルなたイトルの5枚目。そのタイトルには理由があるはずだ。それをこう想像する。「迷いが無くなったのではないか?」。

様々な曲調が一枚に収められていたとして、それを「パリエーション」というか、「迷い」というか「商魂」というかは聴く者の主観によるだろう。だから彼女の場合も迷いと言わずに、パリエーションと呼ぶべきなのだろう。だがどうしても前述のカヴァーアルバムを除いた3枚のアルバムと最新作では、「1枚の差」を越えた違いを感じるのだ。それは、奇しくもM-1の「もう迷わない」という歌詞にこじつけるまでもなく、「迷いのない感じ」なのである。

「今までよりも増して、シンガーである以前に人として感じるストレートな感情を込めている」というのはありますね。曲によりますが、世の中って、蓋を開けてみないと解らないことばかりじゃないですか。まるでキャンブルみたいな。で、例えば蓋を開けたときに、それが大外れだとしても賭け事で遊んでるみたいな、何ていうのかな、タフに乗りこなせる自分でありたいというか、でもやっぱり外れたらガッカリはするけども(笑)、そんな強い自分でいたいという願いを込めた曲もあったり、好きだからこそ切なかったり、永遠だからこそなかなかかったり、といった表裏一体な気持ち唄った曲もあったり。私個人として生きていく中で感情をストレートに曲に込めましたね。

「Tina」「N」「A」…。自らの名を一つずつのアルファベットに分解して連呼するインターロールドがある。タイトルも自らの名「Tina」と付け、昨年の9月にドロップしたミニアルバム、「作られているシンガーがふれる世の中。自分を作る唯一のシンガー「Tina」の粋な叫びを聞きなさい」。日本のヒップホップシーンのパイオニア「MURRO」によってライナーに書かれた言葉である。つまり、彼女は「作られていないシンガーであ

旅行。それはカウントしないとして、デビューしてプロモーションで来ている。あまりゆっくりにできなかったけれど。それでも京都は好き。何故ならまだ知らないことだらけだから。「見るもの、感じるものが新鮮でしょ? 暮らしてみたいなと思うくらい。お漬物も美味しい(笑)。同じ事を言う人も多いかもしれないけど、要は京都についてあまり知識のない、こんな私でも何とも言えない程、素敵な場所だなんて感じちゃうってことは(笑)、京都ってすごいんだと思う。祇園祭はテレビでしか見たことがないので、まあその日には仕事をしているわけですが(笑)、その日にその場所にいる、っていうこと自体楽しみですよ。ステージにほど近い東洞院通や烏丸通には屋台も出る。「浴衣でステージですか!? 動き回ってはいけないんですけど、残念ながらそれはいいです(笑)。場所や曲にもよるんですけど、これ(手で30cmくらいの幅をつくって)、しか動けないって言われても、その幅で一杯動くん(笑)」。

彼女の小柄な体はパワフルだ。取材時点ではまだ現場を見ていない。ステージは「花穂 kasui」。決して大きいとは言えないが、キャバの小さな場所で唄った経験はある。それにしても、そもその業態が飲食店である。

そこで我々は、忘れかけていた重要な技、インプロヴィゼーションを目の当たりに。

キッカケは「RAG」でのライブだった。「花穂」のオーナー・森氏が見初めてラウコールを送った。「RAG」と言えばプロフェッショナルなリズムが強いライブハウスとして名高い。「花穂」でもその時と同じ、ドラム、ベース、ギター、ピアノの「フォー・リズム」と呼ばれるメンバー構成になる。スリールバンドやアコースティックデュオなどと比べれば音源は多いかもしれないが、時にホーンセクションが音に厚みを持たせるR&Bにおいては、少ない部類と言っても良いだろう。本番数日前に京都に入り、念入りなりハサールを予定している。今回のライブで競演するミュージシャンとも初

むしろ得意中の得意では? 「得意というよりも、楽しいですよ。そう。得手不得手を表現しようとする者は、すぐにそのことを忘れてしまう。ただ、楽しむためには実力が要る。むしろ実力がなければ「楽しい」と言えないことは言えるまい。フィーリングとインスピレーションを即時に理解したうえで音で会話する。それが京都で、しかも演者が目の前に見えるステージで行われることは、僥倖ではないか。

父から娘へ、そして成長した娘から我々へ、ブラックミュージックが流れ込む。

「反抗期という記憶がない。」「共通の趣味でコミュニケーションするってのがあるじゃないですか。それで仲良くなるような感じ」で、車に乗って「また難しい曲!」と思っていたジャズは、いつしか大好きな父とのコミュニケーションに無くてはならないものになっていった。言葉の上に積み重ねて親子の関係を豊かにするもの。それが今の彼女にとってのジャズだ。

その関係は、父娘だけのためにあるものではない。「ジャズ」を「R&B」という言葉に、「父と娘」を「Tina」と京都のオーディエンス」という言葉に、「車の中」を「青山の京都」という言葉に置き換えれば、それは我々と彼女の関係になる。彼女は父から血を分けてもらっただけでなく、ソウルやサウンドを分け与えられて育った。それは髄液のように彼女の中を流れているのだらう。今度は我々が、東の間彼女の血とソウルを分けてもらえばいい。彼女はきつとそれを断らない。'05年の青山を、楽しみに待ちたい。



Tina Super Live 2005 kasui

Kasui & GLENMORANGIE
2005.7.16 (土) @ 祇園祭山

1st stageと2nd stageの入れ替え制で、それぞれ
OPEN ■ 17:00 / START ■ 19:00、OPEN ■ 21:00 START ■ 22:00
いずれもスタンディングライブで、限定先着85名、前売り3800円、当日4300円。

チケット問い合わせ
花穂 Kasui 京都市中京区高倉通船場西入ル南側 日昇ビル1F 075-257-2080 <http://www.kasui.jp/>
※上記中からもチケットの購入可

上記に先がけて6月25日(土)には茨城水戸「Girl talk (029-225-0050)」で、翌26日(日)には福島いわき「Bar Queen (0246-21-4128)」にてゲストライブが予定されている。

Information

Tina (ティナ)

東京都出身。'99年に1stアルバム「Colorado」をリリースし、オリコン初登場1位を記録。2000年には「日本ゴールドディスク大賞 ニューアーティスト・オブ・ザ・イヤー」受賞、同年には「キリン FRE」のCMにも出演。以来'01年末にかけて、2ndアルバム「Orario」、カヴァーアルバム「Respeto~Tina's cover album~」3rdアルバム「Cuore」を発表し、昨年9月にミニアルバム「Tina」をリリース。ライブイベントの出演を精力的にこなしている。